

## 句集編輯者としての子規と紅葉

松岡 滿夫

### 要 旨

本稿は西京大學學術報告人文第2號に掲載の拙稿「新派俳家句集」と「俳諧木太刀」につぐもので明治新俳壇の代表句集二種の解説である。従つて句集の性質を明かにするために作品について徹底的に批評すべきであると思ふが私の興味は句集編輯のことや編者の主義主張の方面に傾き過ぎ、書き終へた後に多少不満を覺える結果となつた。然し私としては子規、紅葉の俳人を理解することより以上に文學としての俳句藝術がどんなものであるかといふことに心が傾き勝ちである。勿論それも充分に追究してゐない。ただ微意のあるところを斟んでいただければ幸である。

### ○ 春夏秋冬

一

「春夏秋冬」は俳書堂の發行で假洋裝の袖珍木四冊の類題句集である。俳書堂刊行の俳諧叢書中七、八、九、十の四編をなしてゐる。然し編者は春之部のみ子規、夏之部以下は碧梧桐、虛子共編である。發行年

月日も春之部は明治三十四年五月廿五日、夏之部は三十五年五月十五日、秋之部は三十五年九月十七日、冬之部は三十六年二月一日となつて居り、全部完成するまで約二年のへだたりがある。子規は三十五年九月十九日に歿してゐるから冬之部だけは子規の死後出版である。子規はその死までに獨力でこれを完成したかつたのであらうが病氣が重くなつて中絶のやむなきに至つた。「新俳句」が子規の熱心な校閲のもとに碧玲瓏、三川によつて編輯、完成されたのに對し、これは春之部だけに終つた。句集編輯は子規の業績のうち、それほど重要視されてゐないが、今にして思へば、未完成はまことに残念な次第であつた。

子規がこの句集編輯をいつ頃思ひ立つたか明らかでない。彼の書簡集、隨筆、雜文などを一わたり見たがそのことについて語つてゐる所はなかつた。ただ隨筆「墨汁一滴」の中にこの句集の序文がそのまま載せられてゐる。「墨汁一滴」は三十四年一月十六日から七月二日にかけて日本新聞に連載されたものであるが、句集の序はその五月十八日に發表された。序の日附は五月十六日、出版は前述の如く五月廿五日、であり出版より一週間早く、子規は之を世間に發表した。子規は「墨汁一滴」の中に何度かおのれの病氣の苦しさを訴へて居り、この序を發表する前

日、即ちこの序を書いた翌日の十七日にも「痛くて／＼たまらぬ時、十四五年前に見た吾妻村あたりの植木屋の石竹畠を思ひ出して見た」と書いてある。一日一日を不安と苦痛の中に過しつゝ、隨筆や評論に筆をとりつゝ、句集が編輯されてゐたことを思はねばならぬ。編輯を思ひ立つてから、句の選抜が日々の病苦を忘れるよすがであつたかも知れない。「墨汁一滴」には今一つ「春夏秋冬」と關聯して氣になる文章がある。それは三月十日の、竹村秋竹編「明治俳句」に對する批評である。「明治俳句」は二月二十八日、博文館から發行された日本派の類題句集で「春夏秋冬」と同じく袖珍本型であるが分冊でなく全一冊となつて居り、季題の配列は大體「新俳句」に倣うてゐる。「明治俳句」はどこから見ても當代の日本派の代表句集として出版されたものである。それが子規の「春夏秋冬」より三カ月先きに出版され、しかも出版の後間もなく子規が秋竹に對して人身攻撃的批評を發表したことを考へると、この二つの句集の間に何か氣にかゝる問題を豫想するのである。子規の秋竹に對する鋭い口吻は「墨汁一滴」の文について直接に味はれたい。碧梧桐もその著「蚊帳釣草」に「明治一萬集」といふ近刊の句集がある。今井某の選であるが、其材料は重に「ほととぎす」「日本人」及び「日本」の俳欄等で成立つてゐる。殊に句數の多い「日本」の俳欄は中でも重要な材料になつてゐるのである。嘗て秋竹が「明治俳句」を作つたのと同じ手段であつた。俳界にも往々かゝる狡兒がある」と言つてゐる。碧梧桐は句集の材料を選者に斷りもなく「日本」から取つたことを非難してゐるが、子規は句集が「如何なる手段によつて集められしか問ふ所に非ず」と云つて、その最も非難されるべき點として編者が金まうけの爲にしてゐ

句集編輯者としての子規と紅葉

ることを指摘し、更に今の新著作の十の九はかくの如き動機をもつてなされてゐると述べてゐる。秋竹は子規が「明治二十九年の俳句界」で當時の有力俳人として推薦した一人であるが、三十四年頃に俳句に疎遠になつてゐたと子規もいひ、その秋竹が内容に於て「春夏秋冬」と同じものを、それよりも早く出版したことに憤りを感じる、これは子規ならずとも、誰にもあり勝た事であらう。嘗て「新俳句」が編輯される頃、それよりも早く「新派俳家句集」が出されたので編者泥牛が日本派より彈劾された事と同一轍にある。ただ「新派俳家句集」は編輯様式に「新俳句」と異なるものがあつて、多少とも存在の理由を有し、今日の史家に注意されることになつたが、「明治俳句」は「新俳句」の踏襲であるうへに、（挿畫を以て色づけた點も「新俳句」に從つたのであらう）内容に於て「春夏秋冬」と同じ並びにあるのであるから、いつしか一顧もせられなくなつてしまつた。

「春夏秋冬」も「明治俳句」も材料としては主として「日本新聞」の子規の選句によつてゐる。無論「日本新聞」だけでなく日本派の活躍するすべての方面にわたつて材料を求めることが出来るが中心は「日本新聞」にあるので、從つて二つの句集に共通の句がかなりあらはれる。それだけに兩句集の性質はよく似通つてゐる。子規がその序に「春夏秋冬は最近三四年の俳句界を代表したる俳句集となさん」と述べたが「明治俳句」といへども同趣旨によつてゐる。從つて資料としては兩者の間に價値の高下はない。あからさまに言つて編者の有名無名によつて價値が定められたともいへる。

共通の材料によつて編輯されたので兩者の間に共通する句があらはれ

る、その共通句を比較する時、語句や作者の異同などがあつて、いづれが正しきや迷ふこともある。二つ三つ例を以て示さう。

霞む日の湖(海)見渡すや橋半 子規

括弧の中は「明治俳句」のもので句意(湖は琵琶湖、橋は瀬田橋)から見て妥當を缺く。

富士淺間二日やいと煙かな 虚子

が「明治俳句」によると

二日灸富士や淺間の煙かな 虚子

と見える。恐らく同根の句であらう、句意は前者が富士淺間を主題として二日灸が比喩に使はれてをり、後者はその逆をなしてゐる。句意の面から前者に好感が持てるのであるが、その原作が後者であつたことは虚子の一題十句(三十二年三月・俳諧馬の糞所載)によつて知られる。しかも「春夏秋冬」には碧梧桐の

兩肩の富士と淺間や二日灸

が同じ二日灸の季題に入れられ、虚子の句と同材である。碧梧桐のこの句は無論二日灸を主題とし、富士淺間を比喩としてゐるのであるから、句意の上から子規は同材にして異趣異風と考へ採用したのであらう。「明治俳句」の句形では碧梧桐の句と同趣になり、いづれかは捨てなければならぬ。子規が選をする時、工作の手を加へたかも知れない。

桃李實をとる迄と接ぬ可し 船山

桃三年柿八年と接ぎぬべし 船山

前者が「明治俳句」後者が「春夏秋冬」にのせられたものである。作者を同じくする以上いづれか一方が原作で他が變改されたものと思ふ。句

柄は前者の素朴すぎるに對し、後者の諺を入れて少し空想味を交へた點に好感が持てる。従つて斷言は出來ないが、原作の變改は子規の側にあると考へたくなる。

子規は春之部を編むに原作の尊重といふより、句集としての氣分統一を果さうと感じてゐたのであらう。従つて必要次第では句の改作は辭さなかつたものと思はれる。但し春之部は全く子規一人の選になるのではないらしく、秋之部の序又識によると「春之部は子規子の選終りし後、其勸めに従ひ『日本人』『反省雜誌』『國民新聞』等より些少の句を抜きて加へたりしも、夏之部以下は之を爲さず」とあるが如き事情があつたのであるが、そのことが春之部の統一氣分にさしたる影響も及ぼさなかつたやうである。

更に夏之部以下に就て、二つの句集の共通句を比較して見るに、語や作者の違ひは無論ある。例へば

鶏頭は杖を力に野分かな

の句は「春夏秋冬」では虚子とあり、「明治俳句」では子規となつてゐる。子規の句を集めた「寒山落木」や「俳句稿」に見えない句であるから、虚子の句とするのが正しいと思はれる。又次の句では

寒ければ何を(と)いふても空寢哉 月我

落葉して箒の如き(やうな)銀杏かな 芳水

生けて久しく茶の花散りぬ土(大)達摩 子規

括弧の中が「明治俳句」所載のもので、特に子規の句は「俳句稿」によれば土達摩であつて、或は「明治俳句」の誤植であるかも知れない。然し「と」や「やうな」は誤植とも思はれず、不用意な編者の誤記か、又

は「春夏秋冬」の誤りか、それこれを比較した上では「明治俳句」が少しく杜撰であつた。たゞ「明治俳句」は句數が多く「春夏秋冬」にない句も相當にあるから、一方では當代の句風を窺ふ補ひにもなる。勿論それだけのものである。現在は殆ど顧るものもみない。

## 二

「明治俳句」を金まうけのための著作として擯けた子規も既に「文學は神聖なり。絶對なり。高尚なり。超脱なり。政治に左右せられ、風潮に動搖せらるゝ者は文學に非ず。金錢に由て價值を定められ、毀譽に由て價值を動かさるゝ者は文學に非ず。」（明治二十七年、文學漫言）と言つてゐる。この氣節が芭蕉を教祖の地位から引下し、蕪村を墮滅の中から發掘したのである。明治の俳諧復興は一人の子規を待たずとも行はれたかも知れないが、文壇から恐怖を以て迎へられ、文壇を壓倒せんとする程の復興振りを示したのは子規のこの氣概に由る。明治二十八、九年頃、小説家批評家から俳句排斥の聲が盛んに起つた時、俳人は小心翼翼、ただ辯護の側にのみ立つた。それが子規の癪に障つてかく云ふ。

俳句辯護説が小説戯曲新體詩等を排斥せんとしたことは未だ曾て聴かざる所なり。是れ何の故ぞ、俳人の卑怯は之を排斥し得ざりしか。

吾は俳人の卑怯を笑はん。俳人の無識は之を排斥し得ざりしか。吾は俳人の無識を笑はん。然れども吾は他に其原因あるを知る。又俳人は防禦の地に立ちたるがために之を攻撃するに及ばざりしか。排斥論の起る前に於ても排斥論の靜まりし後に於ても此種の説を爲す者あらざるを見れば其然らざるを知る。然らば則ち何の故ぞ。曰く俳人（勿論舊派の俳人は含まず）は俳句を知ると共に多少小説戯曲をも知り新體

詩をも知れり。而して俳句排斥者は多く小説戯曲新體詩を知りて俳句を知らざりしがためのみ。（明治二十九年、松蘿玉液）

隨分人を食つた言説であるが、當時の作家批評家の多くは子規の言ふ程度のものであつたやうだ。子規の言説には案外に攻撃的な所がある。彼の隨筆、松蘿玉液、墨汁一滴、病床六尺、など今日も一讀の値打があるのは、俳句や短歌が間に折入れられてゐる所謂文學的趣味あるに由るといふより、むしろ善惡を明瞭にして思ふことを腹藏なく發表せるに由るといへよう。もしこれらに純乎たる正義感がなかつたら讀むに値しないだらう。正を尊ぶ心から迸り出た言説が時として人身攻撃と見られることもある。子規もおのれの言説がかくの如く誤解されることを恐れて、既に早く人身攻撃の語に疑を抱いた。次の引用は長きに失するが子規の心持を知るには註解より原文そのまゝがよい。

人身攻撃という語は洋語より翻譯せられて以來長く世間に用ゐられしが吾は今に至りて稍々其意義の上に疑を生ぜり。（中略）若し人身攻撃なる語にして他の政略、學問、技藝等を攻撃すべき所に他の惡行（實際在りたりし）を舉げて之を攻撃し是に由りて他の政略等を攻撃する手段となすを謂ふとせば其手段の卑劣なる點に於て人身攻撃とは惡き事なり。若し又人身攻撃なる語にして單に人の惡言惡行（實際ありたりし）を舉げて之を非難するを謂ふとせば人身攻撃は必ずしも惡き事に非るなり。此の如くんば人身攻撃は社會の制裁に於て徳義の制裁に於て必要なること屢々之有り。例へばある新聞が其紙上に於て單に某政治家某商人の惡言惡行を舉げ之を非難したるに、ある者は之を人身攻撃として某新聞を誹る。政治家は政治家たる側に於て私

行の善惡に拘らざるべし。詩人も商人も其詩人たり商人たる側に於て私行の善惡に拘らざるべし。故に政治家の政略を議するに私行を言はず、詩人商人の技藝商略を議するに私行を言はざるは勿論なり。されども政治家も詩人も商人も其社會の一人たる上に於て一言一行の上に道徳上の責任を免るべきにあらず。社會も亦人間として同胞として宜しく遠慮なく彼等の惡を責むべし。彼等の惡を責むるは徒に彼等を貶するの目的にあらず、人間の安寧と社會の秩序とを保たんがためなり。然れどもある人は之を人身攻撃なりといふ。是に於ても人身攻撃なる語の意義に疑を生じたり。唯、識者の教を乞ふのみ。(明治二十九年、松蘿玉液)

さて「明治俳句」に對する非難も編者秋竹の俳人としての技術に對してでなく主として金まうけ主義に對してであつた。それも根本は文學の純粹性を尊ぶ所にある。子規は社會、人間、文學いづれを問はず自分が正しいと思つたものはあくまでも主張する性格を持つてゐた。悪く言へば自信家である。漱石に正岡子規といふ一文があり、自信家の子規がまざまざと浮彫りされてゐる。漢詩漢文に自信の程を示したり(漢文は僕の方に自信があつたと漱石は云ふ)外國に居る叔父から當時日本で流行したハルトマンの哲學書を送つて貰つて友人の前で振り廻して友人を恐れしめたり、小説「月の都」を書いて露伴に見せ、ほめられて友人の前でえらがつたり、誠にたあいのない坊ちやん文學青年の姿であるが、漱石には漱石流の見方があるが、それを割引して考へて見ても彼の自信家の程を知ることが出来る。又漱石は子規を妙に氣位の高かつた男とか、非常に好き嫌いがあつて、早熟で、政治家的アムビションがあつて、何

でも大將にならなけりや承知しない男であつたとか批評してゐるが、まこと彼の文壇に於ける活動の根底にかういふ性格が働いてゐたこといふ迄もない。彼は俳諧を歴史的に研究し自ら俳句、俳文(主として記行文)を作つてゐるうちに體驗悟入した美の感覺を播がし得ざるものと認識した時、それを以て藪地に俳句界、短歌界、文章界を切つた。しかもその美的感覺を説明するに當時流行の西洋の美學を必要とせずとして捨て、仕舞つた。勿論子規にはハルトマンを理解する語學力はなかつた。それが子規に幸ひしたかも知れない。鷗外がハルトマンを譯した時も美の極致論などわが文學の立場に何のかわりもないともらしてゐる。そこには固く自己を守つて、たやすく他に動かされない氣位がある。しかし彼は偏狹なる東洋主義者でも又日本主義者でもなさうである。それは西洋東洋のわかちなく學問藝術すべてわが文學に參考にすべきは遠慮なく取り入れなければならぬといふ考へ方をしてゐるのもわかる。漱石が「子規の畫」の一文の中に「子規は人間として、又文學者として、最も「拙」の缺乏した男であつた。永年彼と交際をした何の月にも何の日にも、余は未だ會て彼の拙を笑ひ得るの機會を捉へ得た試がない。」といつてゐる通り、拙劣にもこちこちに日本的俳句にこりかたまることには彼の性に合はない事だつた。彼が體得した美の感覺は敘景、實地、天然、自然、寫實、寫生などその時々に応じて使用せられてゐるこれらの言葉に表現されてゐるが、それに反するものとして彼が常に取り上げた、敘情、空想、人間、理想などの内容も決して排除してはゐない。但し理窟は彼の最も嫌ふところのものである。彼はかゝる點で確かに拙のない隙のない男であつた。彼の俳句作法書として知られてゐる「俳諧大

要」を見てもその如何に所謂拙のない著述であるかを知る事が出来よう。

一、俳句は文學の一部なり。文學は美術の一部なり。故に美の標準は文學の標準なり。文學の標準は俳句の標準なり。

一、美の標準は各個の感情に存す。各個の感情は各個別なり。故に美の標準も各個別なり。

一、美の標準を以て各個の感情に存すとせば、先天的に存在する美の標準なるもの有るなし。

一、各個の美の標準を比較すれば大同の中に小異なるあり、大異の中に小同なるありと雖も、種々の事實より歸納すれば全體の上にて於て永久の上に於て略々同一方面に進むを見る。(明治二十八年俳諧大要 一三十二年出版)

「大要」中の「第一俳句の標準」の拔萃である。これによれば彼は先天的な普遍的な美より個別的な個性的な美をリアルなものとして重んじてゐる。しかも彼はその個性的なものの中に普遍的なものがあるといふ考へをしないで、個性的なものが修練を経て普遍的(概括的)の標準と子規はいふ)なものへ、もしくは學問知識によつて普遍的なものへ近づいて行くと述べるのである。實地や、寫生が最初にして最後であるといふ考へ方ではないやうである。だから彼は彼の體得した美の論を文學の上に一貫して動かないものとはせず、むしろ過程として、或は低く構へて文學道の初歩段階として考へてさへある。中世の幽玄も或は近世のさびも歌人や俳人の生涯をかけてたどり得た美の極致であつたやうであるが子規の寫生だけはそれらとはひとしなみには考へられない。寫生は彼の

性格を背景とした趣味であつてふるさとのやうなものである。彼はそれを以て文學美術を割切らうとした。實地や寫生が自分の趣味に合つて好きだといふ解釋の仕方が如何にも明快で自信家らしい彼をよくあらはしてゐる。幽玄やさびが和歌や俳諧の如き短詩形の中に深まつて行つた如く、子規の寫生論は短詩形の中に深化して行くやうなものではなかつた。あらゆる文學、あらゆる藝術に對し先づ彼は實地もしくは寫生を好む我が眼、わが心にはなはないかをしらべるのである。そこで考へねばならぬ事は、子規にとつてはたとへ學問知識によつて普遍的な美の標準に近づき得ることがあるにしても、それはどこまでも近さであつて、その標準は一つの假定に過ぎず、彼の藝術の眞實のありかは實地、寫生の趣味であつたといふことである。だから彼は寫生から出發して又寫生に歸つて行く運命にあつた。

### 三

子規が蕪村を見出し、蕪村に傾倒して行つたのは、寫生から出發して假定的普遍美を目ざして前進して行つた心的過程の必然であつたと思ふ。後に短歌の革新をはじめた時も、同じ心的過程をたどつて萬葉をあげ、實朝を萬葉以後の第一流歌人とし、曙見、元義、宗武等をあげたのである。だから蕪村が確かに彼の眼を開いてくれたのである。しかしいくら蕪村の藝術を稱揚しても普通の美は手にもかゝらない假定の彼方にあるので、ともすれば寫生を愛する心のふるさとに歸らねばならないのであつた。蕪村調の模倣といひ、蕪村調の成功といふも子規のかういふ心的過程を無視しては理解出来るものではない。

蕪村調の模倣は寫生に出發して普遍美に至らうとする過程に生じた現

象である。子規の知性は單純素朴な質地、寫生の美に俳句を限定することが出来なかつた。蕪村は子規の感情をも満足せしめたであらう。然しそれより以上に知性を満足せしめたやうに思ふ。「芭蕉の後百年に出て、始めて潤眼を理想界に開けり。是に於て紛々たる今古の人事、雜然たる天然の風光、千様萬態一として蕪村の俳句に上らざるなし」(明治

二十八年、俳諧と武事)の蕪村評の中に子規の蕪村理解のあり方を知る。「俳人蕪村」(明治二十九年草稿、三十年日本新聞、後ホト、ギス轉載、三十二年出版)は芭蕉に比敵すべく或は之に凌駕する所ある蕪村の美を鮮明にせんとした子規の唯一の蕪村論である。この中に説いた蕪村の美こそ當時子規が俳壇に期待した美であつた筈である。子規の説いた美の名目をあげて見ると、積極的美、客觀的美、人事的美、理想的美、複雑的美、精細的美、の六つである。積極は消極に對し、客觀は主觀、人事は天然、理想は實驗、複雑は簡單、精細は印象不明瞭とそれと相對するものを用いて論鋒を進めて居り、その用語は新來の哲學或は美學上のものを借用したのであらうが、それらの學問に累はされることなく、子規は子規として彼一流の明快な結論を下した。しかし積極的以下の並の美と消極的以下の並の美との間に優劣を設けたのではない。芭蕉の消極的美を尊ぶ餘りに弊害として一種の厭味を生じたことを排斥するのである。實地や寫生はその厭味に陥ることが少いから尊ばなければならないといふのである。ただ子規の知性が實地や寫生に止ることを許さないから、積極的美も複雑的美も厭味に陥らざる限り求めて行かうとするのである。だから蕪村が彼にとつて意味を持つて來た。かかる論理は最早論理ではない。子規の文學論といへば寫生論がとり上げられるが寫生論は論理では

ないといへよう。心のふるさとであり趣味であつた。ふるさとを離れず、趣味に基いて、しかも知性の要求にまかせ、外延的に擴がらうとして、蕪村が見出された。その要求を満たす時は芭蕉も尊いのである。短歌では萬葉や實朝の崇拜となり、繪畫では洋畫の尊重となつた。

#### 四

少し廻り道を過ぎた。主題は「春夏秋冬」である。子規は此の句集の序に「最近三四年の俳句界を代表したる俳句集となさん」と言つてゐる。「新俳句」以後の代表句集の意味である。しかし子規の句によつて調査して見るに明治二十七、八、九、三十年の句も相當數あるので、最近三四年に限定されてゐない。恐らく選抜の主眼を最近のものに置いたことであらう。

最近三四年の俳風を同じく此の集の序で子規は「蕪村調成功の時期」と言つてゐる。蕪村調成功とは「余が曾つて唱道したる俳句は天然を詠ずるに適して人事を詠ずるに適せずといふ議論を事實的に打破したるが如し」の意味であつた。蕪村調必ずしも人事のみをよむ事ではないが「俳人蕪村」の中にも既に人事的美を特筆し、引續いて太祇、召波、几董等の蕪村關係の天明俳人を研究し、それらの作家が實景實情をのみ叙した芭蕉、境涯の句境より一步も離れようとしなかつた芭蕉よりも俳句の世界を一段と擴張發展せしめたと考へ、範をその天明諸家に取ることによつて現在の俳句界を多彩ならしめようとしたのである。そして子規はそれに成功したと考へた。一度は猿蓑の中の凡兆が寫生、寫實の作家であることが見出されて、もてはやされたがそれもいつしか影が薄れてしまつてゐた。蕪村一派の俳風は依然として子規一派の目標であつた。句の

用語の上から「春夏秋冬」を見るに脇息、女房、金殿、揚屋、沙彌、木辻の君、貧乏町、瘦村、遊廓、寺、佛師、廢院、隱者等が依然として蕪村模倣時代の名残をとどめてゐる。

春風や西鶴は行く女護の鳥

碧梧桐

不恐に瀾首の船や君の風

子規

白梅や却て嫌ふ紫衣の僧

青々

かかる句が「春夏秋冬」にのせられてゐるといふことは或意味では「新俳句」より退歩したことになるかも知れない。かういう句も「新俳句」では或は若々しくその時代の浪漫調に適合したかも知れないが、整に定型律に従つただけにきざらしくひびく。これよりもまだ次の

磊々として田螺落々として焼豆腐

子規

梅影榭材として月光西へ渡るかな

格堂

の如きには好感がもたれる。しかしこれとても「新俳句」の二番煎じに過ぎない。これ等は子規が選擇の標準を第一佳句第二流行したる句第三多の選に入りし句の三條項に置いたのであるから、その第二、或は第三の條項に入る句かも知れない。又人事句を自在に詠むやうになつたと言つても

學校に行かずにあげる紙薦

寒樓

ひる飯も喰はずに揚げる紙薦

獅子

など餘りに散文的で句の體をなしてゐないのであるまいか。流行の句にしても随分思ひ切つた選であると思ふ。「春夏秋冬」の總句數は三五六八句あり、「新俳句」には少し及ばないが、句集としては大きい。しかも春之部の中でも句數多くよくよく味へば選ばでもがなの句が見

出せる。夏之部以下は碧、虛二子が夫々選をし更に合議の上で捨つべきは捨てたのだから春之部に比すると上述の如き缺點は少い。只春之部は子規の氣分で統一され、その他は碧、虛夫々の趣が入り交つて統一に乏しい恨みのあることは否定出来ない。その碧、虛共編のものの中にも味ひ直せば駄句と思はれるものが出てくるのである。それは碧梧桐の「寒山落木閱讀日記の一節」(ホト、ギス九卷十一號、明治三十九年七月)に

殊に春夏秋冬の夏の部を選んだ時のことなどを思ひ出しては覺えず悚然としたのである。或晩であつた、枕頭に侍して居ると、其話が出て、アシの句はあんなものしかなかつたかな、夕暮や必ず麻に一嵐なんて月並臭いぢやないか、といふやうな權幕で、其草稿をくりひろげては、この句をと指定はせぬが、予等の選の甚だ意に満たぬものであることをそれとなく罵倒した。

とあることを参考にすればわかる。この文は碧、虛二子が子規の句稿から選抜して子規句集(明治四十二年六月、俳書堂刊)を編輯した時の苦心談で、この子規が麻の句を月並と言つた氣持も、又碧梧桐が句の選は選者によつて異ると辯解した氣持もよくわかる。この麻の句は夏之部から削り取られなかつたし、又子規句集にも子規からあれ程に言はれ乍ら入れてゐる。今春之部の中から私なりに私の好きな句を探して見た。

人に死し鶴に生れて冴え返る

漱石

朧夜や顔に似合はぬ戀もあらむ

〃〃

堇程な小さき人に生れたし

〃〃

すこし飲んで酔ふたそぶりや春の宵

一五坊

秘事の何か忘れつ西瓜蒔く

靈子



あす越ゆるあたりなるらん山を焼く

鬼火

其中に田螺顔なる小石かな

麥人

や、主觀を入れて感じのよい句といふ標準で選んで見たがなかなか思ふやうな句がない。又編者子規の句にこれと思ふ句の見當らないのも不思議である。

雪 殘 る 頂 一 つ 國 境

子規

よく知られた句で、所謂天然の句であるが三十二年の作で病床の子規が眼前をよむ筈なく空想になれるものであらう。とにかく子規の句でよいと思はれるものはかゝる性格のもので

薪燃えて靜の顔を照しけり

子規

の如き句は蕪村調めかしているが同感することが出来ない。變調の句、漢詩漢語雅語を入れた句なども屢々見出せるが、「薪俳句」以上に成功してゐるとも思はれない。

汐干より今歸りたる隣かな

子規

初雷や物に驚く病み上り

〃〃

庭に來る胡蝶うれしき病後かな

〃〃

かういふ實情の句が想像の句よりもよい。子規も「明治三十四年の俳句界」(子規の病床談話を碧梧桐の筆記したもの、三十五年一月一日)に「予は近來の流行俳句に慍焉たるものなり。何をか太祇調と言ひ、何をか召波調といふ。是れ已に解すべからず。一見嘔吐を催さんとす」と言つて居り、その死に近づくにつれて天明俳人の後塵を拜することを嫌悪してゐる。岡野知十が「晉其角」(明治三十三年三月豪華房刊)の中で「日本派が、その蕪村調より一變して『猿蓑』に入る。平易に、自然に、殆ど尋

常一様窓前の月を咏じて妙となす」と言ひ、つゞいて又「人ありて頃者内藤鳴雪子に質すに正岡子規子の俳風の昨今に及べり、子曰く『カレて來りしゆへならん』と。『カレ』とは枯燥の意に非ず、絢爛の極、平淡に入りしとの意なるべしと雖も問々人をして枯燥に失するかを疑はしむ、猿蓑を奉じて枯燥に失せずんば平俗に流る、今後來るべき一變化はいかにあるべきか」と言つたことは子規の歩みの中に平淡味のあることを汲みとつたからで、たゞもてはやされた猿蓑と結びつけたに過ぎない。子規としては猿蓑のよさは充分に理解してゐるが、それ以上に天明の絢爛に愛着してゐたのであつて、それも文學としての俳句の發展を期するにある。子規は俳人も文學者である以上その活動を俳句にのみ限ることを不満にする程の自信家であり野心家でさへある。「俳人蕪村」の中にかう書いてゐる。

彼は俳人が家集を出版することをさへ厭へり。彼の心性高潔にして些の俗氣なき事以て見るべし。然れども余は磊落高潔なる蕪村を尊敬すると同時に小心ならざりし、餘り名譽心を抑へ過ぎたる蕪村を惜まざらばならず。蕪村をして名を文學に掲げ譽を百代に殘さんとの些の野心あらしめば彼の事業は此に止まらざりしや必せり。

この一文は蕪村にことよせて自分の心情を語つたものである。「又春風馬埭曲」を評しては「惜いかな、蕪村は之を一篇の長歌となして新體詩の源を開く能はざりき。俳人として第一流に位する蕪村の事業も、之を廣く文學界の産物として見れば誠に規模の小なるに驚かずんばならず」といふ。かかる野心旺盛なる子規が知十の言ふが如き平淡さに到り得たか疑はしい。彼の性格に出た寫生趣味の句に時として平淡味があらはれ

るか、病が重くなるに従つて句作が減少し却つて平淡味が汲みとられるか、そのいづれかである。「春夏秋冬」は絢爛を離れて平淡に到り得た境の句集といふにはまだ程遠いものである。「明治三十三年の俳句界」(三十四年一月、子規談話を虚子の筆記したもの)によると俳句界の停滞をなげき古き人、中古の人皆消えて無くならんとし、新人も俳壇に新風を吹込む程の活動がなかつたと言つてゐる。更につゞいて俳句界の流行に對しては「蕪村を學ぶの結果は弊として亂調の句を見るに至る。太祇を學ぶの結果は弊として月並に紛はしき句を見るに至る。是れ止むを得ざるなり。其一端を捕へて輕々しく全體を是非するは非なり」と述べた。カレて來た、平淡になつた、月並になつた、批評はどうにでもされる、作家としては大猛進あるのみといふのが子規の態度である。だからこの翌年には太祇調、召波調に嘔吐を催すと言つたのである。子規は三十三年の新人として、大阪の鬼史、因幡の寒樓、武藏の稻青、丹後の獅子、天津の鷗盟の五氏をあげた。これらの作家は「春夏秋冬」中にもかなりの句をのせてゐるが、それらの句風は概しておとなしい。鬼史の春寒の句、六句

酔をかけて堅き海鼠や春寒し  
紫の矢がすり羽織る春寒し  
皿にしぼる橙の酢や春寒し  
春寒し水にぬれたる鶴の足  
春寒し鶯を見るガラス窓

首に巻く絹ハンケチや春寒し

空想であれ實情であれ、この一聯が醸し出す気分はかなり抒情的であ

句集編輯者としての子規と紅葉

る。子規が思ひ切つてこの六句を並べ揚げた氣持が臆氣ながらわかる。蕪村の新花摘をどの他の著作より無造作で面白と言つた子規である。「蕪村調の成功」といふ語の意味する範圍がはつきりしないが「春夏秋冬」をよんで感ずる所はかなり複雑である。

夏之部以下の句評は省略する。

## 五

「春夏秋冬」の作者数は三四九名、之を「新俳句」の作者に比較すると共通の作者が一〇六名あり、それに對し新人は二四三名もある。僅か三四年の間にかくの如き多數の新人群——その中には一句作者もあるが——が輩出する所に俳句の大衆性があるのであらうし、一方では日本派が作家經歷は無視して句の出來だけを重んじたからであるともいへる。それが又群少作家への魅力でもある。しかし新作家の中から子規のいふ大猛進を以て傑出した作家となり得た人は寥々たる星の如くである。又日本派から離れたものもあり、新傾向運動の興つた際それに參加したのもあり、ごその後の個人履歴も調べれば興味ある問題であらう。それは後日譚である。東洋城、寅彦、挿雲の名が見られるがこの人達のこととも後日譚である。澤山の作家を藏しながら「春夏秋冬」について語り得る所は子規及びその周邊以外にない。

## ○ 俳諧新潮

## 六

「俳諧新潮」四六判、假洋装、一冊、十千萬堂紅葉輯、明治三十六年九月十九日、富山房發行、表紙には只「新潮」とだけ横書にしてある。

紅葉の筆らしい。表紙の上部に月見草が浮かしてあり裏表紙の下部は流れの側に貝二つが描かれ、地色は樺で、かの「俳諧木太刀」ほどの巧みさはないが感じの上ではよく似てゐる。「春夏秋冬」は春之部は表紙の上部に櫻の花、下部に蝶をあしらい中段より下側に白い部分を殘してその中に書名を横書に隸書で書いてある。地色は薄紅、袖珍本だけに可憐な感じがする。夏之部以下夫々季節のものが配してあり、地色も、薄緑、薄黄、薄青と季節感が持たしてあるやうである。「俳諧新潮」も「春夏秋冬」も書物の與へる感じはそれ／＼特色があつてよい。

「新潮」の巻首には紅葉の短冊四枚と紅葉の屬の爲に描いた（作者名よめず）扇面圖とが寫眞にして載せられてゐる。「春夏秋冬」には寫眞版も挿畫もない。紅葉の短冊は

ようも雨の鶯來たとおもひけり

稗まきの離々として鳴呼鶴病めり

百舌鳥の尾に度るや風の蕭々と

寒の入り見舞はむ伯父か柘榴鼻である。

季題の分類は天文、地理、時候、人事、生類、植物、と大別してその中に各季題を屬せしめてゐる。これは「春夏秋冬」の分類法と全く同じである。（但し生類は動物となす）期せずして一致したものか、紅葉が子規にならつたものか、明かでない。紅葉は讀者の索引の便を圖りこの分類法を句集に適用したまでであらう。子規が先んじ紅葉が後れたのだと見ておけばよい。

「俳諧新潮」の作者数は二四八名、「俳諧木太刀」に比すると可成多

く、總句數も一三〇五句あり、秋聲會、紫吟社同人句集としては最初の大句集である。

作者各々の句數を見るに紅葉が最も多く一二六句、ついで麥人の一二四句、霞山の九一句、この三人が群を抜いてゐる。活東の五五句、小波の五二句、が三人について多い方で、紅葉門の小説家鏡花の四〇句なども特筆したい。同門の春葉二六句、風葉一四句、秋聲一三句となつてゐる。秋聲會同人で「俳諧木太刀」の有力俳人であつた愚佛は四五句あつて先づ地位を保つてゐるが、その撰者竹冷が一九句で少な過ぎるやうである。なほ烏黒の一〇句、四丁の五句、知十の四句、松宇の二句といふ風に當時の有名俳人の句が皆少ないことも注意される。何も句集の中に多くの句をのせた作者が優秀である證據にはならないが少くとも撰者紅葉の好みに合つてゐただけはいへる。

## 七

そこで先づ此の集に於ける麥人の句風を考へて見よう。

曉や出初の半鐘打込んだり

きぬくの猫に袂はなかりけり

君待つと聞くや來世は時鳥

茹菱のいとこはどこもありぬべし

着道樂さてなん紙衣着たりける

わざとめかしき技法のよくわかる句の例としてあげて見た。そしてそこに最も紅葉の好むものがあるのである。註解を要する位に持つて廻つた表現をしてゐる。かゝる表現法は紅葉の俳句に早くからまつはつてゐたもので、子規が理窟もしくは謎で知識に訴へるといつて排斥したもので

ある。例へば紅葉の

霜白しさらばと富士を詠めけり

の句に對し、子規は句の意味さへわからず、知識に訴へずに、只ありのまゝを客觀的に敘述するを可とすと批評し、そして自ら

朝霜の藁屋の上や富の雪

薄赤う旭のあたりけり霜の不二

朝霜や不盡を見に出る廊下口

などせばよく聞える句とならうと言つてゐる。(棒三昧) それが明治二十八年であつた。子規にはこの後蕪村の影響などあつて句風の變化はあつたが本質的には實地、寫生、客觀の趣味は揺いてゐない。同様に紅葉の趣味も二十八年とその晩年との間に何ら移り變りはない。二人の趣のいづれに同感するか、それはどうにもならぬ問題である。子規は紅葉に趣味を押し付けるやうな口振りをしてゐるが、押し付けられた紅葉は苦笑する外あるまい。紅葉の趣味に同感する者があつたればこそ「俳諧新潮」が編まれたのである。麥人は紅葉のその趣味を上手に擲んだもの、一人である。ところでその麥人が「春夏秋冬」にもかなりの句數をとられてゐる。(五六句、そのうち春之部に二七句とられている)「新俳句」にも少しある。(一二句)「俳諧木太刀」にもある。(二〇句)即ち秋聲會派、日本派の兩方に跨つて、いづれにも相當な成績をあげてゐる。まことに上手で器用な作家であつた。例へば「春夏秋冬」中の麥人の句は所謂子規趣味の句ばかりである。

網を持つて一日蝶に逢はぬかな

蝶々の蝶々と遊ぶむつまじき

蝶嬉し二つ來て又更に嬉し

句集編輯者としての子規と紅葉

蝶暮れて蝶のゆくへをなつかしむ

垣越えて蝶去り來る小庭かな

麥人は三十四年頃から單に秋聲會派に屬し、卯杖、木太刀と歩みを共にして行つたが、由來俳人歌人はなか／＼器用な表現力を持つてゐるものだと思ふ。けれど器用は個人の間としての奥底に到達し得ないやうだ。

## 八

次に霞山の句について述べる。霞山と紅葉との關係は紅葉書翰抄(門入星野麥人編明治三十九年一月博文館)によつて知ることが出来る。霞山宛の書翰八通いづれも句に關するものばかり、恐らく俳句の上だけで交渉があつたのだらう。

本日は御遣しに相成候分はいづれも愚意に落ちず候ゆゑ我儘ながら採録不致候間更に數句拜見致度候當番のものならば舊作にても不苦候扱伺ひたきは貴兄の此道に入られ候はいつの程よりに候や將又何所の師につかれ御修行被成候哉年齢職務等も不苦ばぜひ／＼御洩し被下度候草々不盡

十一日

十千萬

霞山大兄

月の前通るも見たし杜宇

二十九年六月十二日付(書翰抄には十九年とあるが誤植であらう)のもので、これより少し前から二人の交渉があつたことを知る。そして二十九年十一月には秋聲會の機關紙「秋の聲」が出されてゐる。その「秋の聲」の第一號には霞山の句見え、漸く第四號(三十年二月)の投吟の部に一句見える。

梅が香のものに紛るゝ夕べかな

その後「秋の聲」の第七號まで調べて見たが霞山の句はない。紅葉と文通しつゝ紅葉風を學び取らうとして居たことだらう。三十年十一月三日付の書翰に

霜夜の列車山北着とよばふなり

朝汽車の北窓ひとし塞ぎけり(ひとしはひしの誤であらう)

引きたての……………

右三句秀逸と存候他の句は撰中に候間いづれ可申上

小生のは推敲中に候へども

ほしのままにプラットフォームの霰かな

三日

紅葉

篠崎順太郎様

とある。よばふなり、ひとしと、いづれも紅葉の好みさうな語使ひである。しかしこの句は「俳諧新潮」にとられてゐない。紅葉のほし、いま、にこの句は「新潮」に入れられてゐる。同じく「新潮」に霞山の

恣に花見て來てのつかれ哉

の句が見えるが、紅葉をまねたものと見られる。「俳諧木太刀」の頃は霞山はまだそれに選ばれてゐない位の作家であつたが、「新潮」では最早有力作家となつてゐるのである。三十六年五月十六日付のものに

然者御句拜見致候處いづれも體を成さず平生の御手際にも似ざる事と口をしう存候。こは畢竟常に題詠をのみ主として修行被成候故事に當

りて自在を缺き候事と存候(以下略)

とあり、紅葉の死の年まで俳句上の交渉の繼續してゐたことがわかる。特に題詠を主にすることを警告し紅葉派の陥る缺點を指摘したあたりな

かなか厳しい。書翰抄によると水馬桐の花時代などいふ言葉が見え、霞山のこれらに據る活動のあつたことを知る。

以上紅葉書翰抄によつて見た霞山であるが霞山の句風についてこの他に加へることはなく、念のため「俳諧新潮」所載の句を二三引いて置く。

貧が子のさはにも草を摘める哉

清水遂に流れ出でたる日南哉

雨乞の上を行く也ちとの雲

夏帽を買ふて冠りてすいと行く

退きがけをひた曳に行く鳴子哉

修飾の語を思はせ振りに使ふ點に注意したい。

徴兵の検査や末を契る戀

思ふどち二人となりぬ涼臺

待戀やふりさけ見たる天の川

かゝる句も霞山の好む處らしい。

鶯のなきもせず居る來なれ振

葉櫻になりおふせたる堤哉

辛うじて萩咲き得たり風の後

用語に工夫はあるが嫌ふ人は月並として排する句であらう。かう見て行くに霞山の句には絶唱とおぼしき句がない。小さい器用にとどまつてゐるやうである。

## 八

紅葉の句についてはこれまでいろいろ／＼な人が批評してゐる。それらの批評と異なる考へも持たないのでこゝでは省略する。「新潮」の中から各

季一句づゝあげて置かう。

初空の戦くや鶴の羽撃つほど

蚤振ふべき千仞の岡もがな

星既に秋の眼を開きけり

年木樵る黄金の斧の切味よ

かゝる句風はそれに對する好悪は別にして子規一派と完全に對峙するものである。中村樂天が「明治の俳風」(明治四十年九月)で面白いと思ふ紅葉の句として二十二句あげたその中で「新潮」にあるものは次の四句である。

日高きに垂れたり蚊帳の黄ばめるを

風わづかに石の上なる蟬の殻

雨來らんとして頻りに揚る花火哉

秋もはやさらばくんと落し水

樂天は子規の俳論に従つて寫生、自然などの趣味を尊重し、それを規準にして十九人の俳人を論評してゐる。好きな紅葉の二十二句も大體の規準をそこに置いての選びであるやうであるが上掲の句でもわかるやうに矢張それづくに技法があると思ふ。それに對する一々の論評は避けよう。

紅葉の俳句には抒情味がない。「春夏秋冬」と「俳諧新潮」との違いも抒情味の有無に歸せられると思ふ。抒情味のないことは詩のないことかも知れない。紅葉の句は一句立てを主眼としてゐる。「新潮」に於て一題一人一句の方法に従つて選んでゐると思はれるのもそこに原因してゐる。子規に従へばとかく安らかに流れ勝ちに、紅葉に従へば工夫に凝り勝ちになるといふのが夫々の追隨者の陥る弊である。

「春夏秋冬」の作者であり同時に「新潮」の作者であるものが數人あ

る。雨六、愛櫻(井泉水)露石などで、このうち雨六は餘り知られない

人であるがそれが秋聲會系統の俳誌俳聲第一卷二號に俳諧小言といふ一

文を寄せてゐる。それによると雨六は三十一年暮から俳句を始め舊派を

一掃するつもりで新俳句運動に参加した。しかるにその新俳句も墮落し

て俳句の魂を失ひ月並者流になつて來た。餘りに没趣味で殊に類句が多

い。例へば

七夕の竹を伐りけり裏の籐

とあれば

門松の松を伐りけり裏の山

また

神の灯のほろくうつる若葉哉

とあるものを

神の灯のほろくうつる紅葉哉

とする。これでは新派の盛大も非運を見るに至ると言つてゐる。雨六は

日本派にあき足らなくなつた理由を述べたのである。半面の五號(明治

三十四年十二月)に知十は

日本派の青年俳家が先輩の後塵を拜して其風調に追隨して其末弊は鸚

鵡の如き傾向あり

と述べて居り、日本派に不満な俳人は皆かういふ考へ方をしてゐた。然

し紅葉派の連中が鸚鵡でないとはいへない。霞山も麥人も紅葉の口振りを

まねたに違ひないのだから。

九

「俳諧新潮」がいつ編輯し始められたか、私には明示出來ない。卯杖

一卷十二號（明治三十六年十二月）の本年發刊の俳書（菱花生）の書評を參考にあけておく

新潮は四五年前より麥人子の企畫によつて秋聲晚鐘會同人間の句を集聚する熱心其數二萬句に及び更に十千萬堂の選定を經し佳句三百餘句を録せる以て尋常一様の句集にあらざるを知るべし

佳句三百餘句は千三百餘句の誤であらう。その他はこれを信用してよいのだらう。麥人の企畫云々は注意すべきである。紅葉は此の集の凡例に古く讀賣新聞に掲げたものと近く俳藪、文藪などに載せたものと別に秋聲會同人の句をも參へ選んだと言つてゐる。紫吟社、秋聲會、晚鐘會、沙鳥會など皆紅葉の關係してゐた句會や結社である。十千萬堂日録（明治四十一年十月廿五日左久良書房發行）の明治三十四年六月十五日の所に（上略）午後俳諧新潮編纂の件にて麥人來る。

と見えるが、麥人が句の資料を集めたのがこれ以前であるか、以後であるか、苔花の言を信ずれば麥人の企畫はこの日より遙かに早く始められてゐなければならぬ。日録の記事から出版迄には二年餘の經過であるからである。

今一つ參考として書翰抄の露石宛（三十六年六月四日付）のものから引用して見る。

目下日々氣分よろしきを見計ひ全集の編輯又はノオトルダムの譯述一寸氣を易へては換葉編の編纂句集の草稿短文の反古しらべなど致し病人のわりに用事多く時々凝りてはしくじり申候

こゝにいふ全集は博文館發行の紅葉全集（第一卷、明治三十七年一月廿一日）で、ノオトルダムの譯述は早稻田大學出版部發行のユゴー作紅葉譯鐘樓守（明治三十六年十二月十八日）である。換葉編は博文館發行（明治三

十六年十一月一日）である。皆紅葉の死後出版である。殊に換葉編は鏡花を始め門生相背り師の病鬱を解かんがために草する所を集めたもので依田百川が序（三月二十四日付）を寄せ「山川未曾病矣。山人必不死矣、」と山人の無事を祈つたが遂にその死までに出版出来なかつたものである。この中には門生の一人として麥人が四季五十二句、春石が四季十三句をのせてゐる。これらの句の中には「俳諧新潮」に載せられたものもある。春石は北島英一、日録によれば三十四年の入門で當時十七歳、であつた。

短文の反古しらべといふのは恐らく草茂美地（草紅葉、草もみちともかく、明治三十六年十一月十五日富山房發行）のことであらう。これも死後出版であつた。句集の草稿とは疑ひもなく「俳諧新潮」を指すものと考へる。この出版だけはその死に間に合つた。二年餘り若しくはそれ以上の日子を費して編輯したものだつた。

追記。子規の「俳人蕪村」を見る時、私は必ず大野酒竹の「與謝蕪村」（明治三十年九月廿六日、春陽堂發行）を引合せたくなる。いづれも時代のローマンチック調に乗じて書かれたものであるが、二人の著書の興へる意味にはかなり異つたものがある。即ち子規は自分の蕪村像を作り上げたが、酒竹は考證的に精細ならんとして却つて眞實の蕪村から離れてゐるように見える。即ち資料的研究の精細さだけでは蕪村は生かされない。酒竹が緒言に「げに田園は天然を靜觀すべきパラデースなり。金剛石も玉冠も一朵の白雲と、一片の幽石とには換ふべくもあらず。ムーゼの神に夢を喚ばれ、雲の君に巻かれて睡る、自由樂園のエンゲル我すなはち是れ。」といふそれと本題の蕪村評との間に調和がとれてゐない。